

紹介

ピーター・バーク著（石井三記訳）

『ルイ一四世——作られる太陽王——』

「朕は国家なり」と称し、太陽王としてフランス絶対王政の黄金期を飾ったとされるルイ一四世。本書は、そのようなルイの持つ「全能の君主」としてのイメージが、七〇年以上にもわたるその治世において、どのように形成され、どのように変容したのかを分析したものである。著者は『フランス歴史学革命』や『ニュー・ヒストリーの現在』（タイトルは全て邦訳）等の著作で知られるピーター・バーク。ヨーロッパ文化史に関する研究や、歴史の方法論についての優れた分析で、我が国でも馴染みの深い歴史家である。

邦訳の出版は本年であるが、原著の初版は一九九二年のことであり、先に名前を挙げた著作の出版とも時期的に重なる。故に、本書には『ニュー・ヒストリーの現在』におけるダーントンの読書論や、ギヤスケル

のイメージ論を彷彿とさせる方法論の実験が随所にみられ、また著者自身も、自らの著作の射程が「単なる伝記」のそれを越えたものであることを強調している。このような本書の狙いは、ルイ一四世を一つのモデルとして、いわゆる「偉人」が創出されるにあたり、権力と芸術の間にどのような関係が生ずるのか、そしてそこから生まれたイメージがどのように受容され、あるいは批判の対象となっていくのかを解明することであり、最終的には現代におけるプロパガンダ論への接合を意図しているのである。

とはいえ、「世論を操作する手段」としてのプロパガンダ論が、そのままルイの時代に適用されているわけではない。第一章「ルイ一四世の紹介」において、著者はいわゆる政治的プロパガンダ（当然そこにはフィクションの利用が伴う）の概念が一七世紀には存在しなかったこと、また当時の君主のイメージがある程度聖なる権威を持ち、信仰の対象となっていたことを認めている（例えばロイヤル・タッチの聖性）。ところが一方で、民衆を説得・操作するための「虚構」として君主のイメージを利用

することについて、時の政治エリートが多くの無知であったと断定することもできない。故に著者は、単なる虚飾であることを知りつつも、政治エリートが君主におもねり、民衆を操作するためにルイのイメージを創出したというプロパガンダ的視点と、彼のイメージが額面通りに受け止められ、君主崇拜の一部として機能していたと見なす一七世紀的視点の双方を併せ持つことが重要であると述べている。

このような分析視角に立脚した上で、第二章「説得」では、ルイのイメージを創出する上で頻繁に用いられた素材、すなわち新聞、絵画、タペストリー、メダル、版画、演劇や宮廷儀礼等が紹介される。また、ルイを賞賛する上でよく用いられたジャンル、表現様式、アレゴリー等が概観される。

続く第三章「日は昇る」では、前述の素材を用いつつ、幼少期のルイのイメージを創出したマザランの活躍が描かれ、第四章「システムの構築」では、マザランの後を継いだコルベールによって、当代一流の芸術家がルイを称えるべく召集され、イメージ創出のためのシステムが構築されたことが明らかとなる。絶対王政とは一般に、

「常備軍と官僚制の発達」というキーワードで理解されることが多いが、当時は芸術においても「官僚化」といふべき現象が進行していたのである。

第五章「自己主張」及び第六章「勝利の時代」では、親政を開始したルイが、自らも積極的にイメーヅ創出に乗り出していたことが明らかにされる。この時期、戦争での勝利によって栄光を誇示しようとしたルイは、お気に入りの芸術家や歴史家を戦地にまで連れて行ったのである。

次に第七章「システムの再構築」では、オランダ戦役後、ヴェルサイユに定着するようになったルイによって行われた様々な儀礼行為と、イメーヅ形成の関連が検討される。加えて、後世には批判されたナントの勅令の廃止が、クローヴィスや聖王ルイ九世にも比肩すべき異端根絶の功績として公式には賛美されていたことが示される。続く第八章「日は沈む」では、栄光に驕りが見え始めた晩年のルイと、彼の全能ぶりをもはや強調することのできなくなったイメーヅ政策との対比が描かれている。

第九章以降は、前章まででフォローしきれなかった点を論じたものになっている。

まず第九章「伝統的表現の危機」では、一七世紀に拡大しつつあった知的革命により、知識人の間で神秘的なものの見方が衰退していく中、ルイのイメーヅ創出がこうむった影響が、一〇章「メダルの裏面」では、ルイの治世に対して行われた国内外の批判が、実はルイを称えるために創られた公式のイメーヅをパロディ化したものであることが示される。また、一章「ルイ一四世の受容」では、ルイのイメーヅに対するパリと地方の上流階級、外国の宮廷の反応が紹介される。最後に第二章「比較のなかのルイ一四世」では、ルイのイメーヅの系譜論が展開されている。フェリペ四世やコジモ・デ・メディチ等、ルイに影響を与えたとされる君主の紹介と、二〇世紀の統治者達が行ったプロパガンダ政策との比較が行われ、本書の考察は終わる。

いずれの章も、著者が持つ該博な知識、方法論的な面白さが存分に盛り込まれており、図版の挿入も豊富である。加えて、意外な人物が意外な形でルイのイメーヅ創出にあるいはその批判に関わっていることが明らかにになる点も、本書の魅力の一つであろう。

ただ、フォローしている領域が広い分、個々の分析については今ひとつ掘り下げが足りない印象を受ける。また、図像史料の解釈に関して、他の研究者の見解がそれほど紹介されていない点も少し残念である。とはいえ、現代の政治文化との関連も視野に入れて考察がなされた本書は、訳者石井三記氏による読みやすい日本語訳と分かりやすい専門用語の解説が加わって、専門分野の垣根を越えて読者を獲得しうるだけの素地を持っている。一読をすすめたい。

(A5版 二九二頁 二〇〇四年八月)

名古屋大学出版会 税別四二(〇〇円)

(山中聡 京都大学大学院文学研究科博士後期課程)

川田 稔編

『浜口雄幸集』

資料集に接する喜び、読み解く快樂というものを、歴史家を志す者は誰もが知っている。ただ、そこから論考を構築していく楽しさまで与えてくれる資料集は、そう多くない。ここで紹介する川田稔氏編纂の